

個別共同研究 4

持続と変容の実態の研究——対馬 60 年を事例として

前提としての九学会連合対馬総合調査について

橋川 俊忠

KITSUKAWA Toshitada

はじめに

社会学や民俗学の調査は、なんのために行うのだろうか。社会や人々の営みを記録し、それを後世に残すためであろうか。それとも、それを基に論文や報告書を書き、研究業績として積み上げるためであろうか。この問いに対する多くの研究者の答えは大方見当がつく。それは、その両方だ、というものであろう。しかし、その論文や報告書は誰に向けて書かれているのであろうか。もし、それが、研究者の仲間組織である学会に向けて書かれているとすれば、調査の対象も学会的関心に従って限定されることになる。そうなると、それまでには扱われることのなかった事象に関心が集中する傾向が強くなるをえなくなる。学会で研究業績として認められるには、新しい事象を提示することがもっとも早道であるからである。したがって、すでに調査された、あるいは普通の「ありふれた」事象には関心が向けられることは稀になる。

たしかに、普通の「ありふれた」事象の調査では、研究上の新しい発見はあまりないかもしれない。研究者の関心を引くことはあまりないかもしれない。しかし、社会学や民俗学は、普通の人々の「ありふれた」日常を記録し、分析することを目的としていたはずである。そういう目的の中には、調査記録を経年的に蓄積して、その時間的経過の中で、何がどう変わり、何が変わらなかったのかを明らかにすることも含まれているのではないだろうか。それは、立派に研究として成立する。

それだけではない。そういう調査記録の蓄積や研究は、調査の対象となった地域とそこに住む人々にとって重要な意味を持つ。なぜならば、地域の生活や文化の記憶は、それが「ありふれた」ものであればあるほど意外なほど簡単に失われるが、それが記録されているということは、記憶を喚起し、自分たちの過去を知るための大事な「よすが」となるからである。よくいわれるように、過去を正しく知ることなくしては、よりよい未来を築くことはできないとすれば、ごく近いと思われる過去の記録であったとしても、それは地域の人々にとっては貴重な記録である。

そして、学会に向けた研究の場合、専門領域が細分化されつつある現状では、研究者の関心はそれぞれの専門に適合した細分化された領域の事象に集中されがちである。しかし、地域の人々にとっては、地域総体の広範な事象に関する記録の方が有益である場合が少なくない。地誌や民俗誌と呼ばれる記録は、対象とした一つの地域に生起する事象を総体として記録するものであったはずである。

ところで、上述したような近い過去の日常を調査し、記録して時間的経過の中で持続と変容の態様

を検討するための基礎となる資料は、報告書あるいは民俗誌などの形で残されることになるが、そうした目的にふさわしい内容を持つ報告書や民俗誌は必ずしも多くはない。あるいは多くあっても知られていないのかもしれない。その点、九学会連合による対馬調査の記録は、対馬のいくつかの集落単位の地域についてのある程度詳細な報告を含んでおり、それが戦後最初に行われた大規模な総合調査の報告でもあること、当時気鋭の研究者達による調査であったことなどの点からも、十分先述の目的のために利用可能な資料であると思われる。本プロジェクトは、そうした九学会連合対馬総合調査の成果を生かすために、調査後60年の対馬の現状を調査し、この間にどのような持続と変容の事象が見られるかを検討するために企画されたものである。

とはいっても、少ない予算とわずかな人員での短期間の調査であったため、とても十分な調査ができたとは言い難いのが実状である。したがって、以下の報告は、調査の目的からすれば、ほんの一部分のサンプル的報告にとどまるということを断っておきたい。

九学会連合総合対馬調査の概要

九学会連合による対馬総合調査の経過については、調査の当事者による記録がいくつか残されている。それらの中で、日本文科学会の機関誌『人文』はその創刊号（1951年）で「対馬調査」を特集しており、もっとも重要な経過報告となっている。特に、「八学会の対馬調査はどのようにして行われたか」という小堀巖の報告（以下「小堀報告」と略記）、および巻末の「対馬共同研究に関する座談会」（以下「人文座談会」と略記）は、この調査の経過と問題点を知る上で極めて貴重な資料である。ただし、この報告および座談会は、1950年に実施された調査に関するものであり、51年の調査は含まれていない。次に、対馬総合調査の成果である『対馬の自然と文化』（1953年 九学会連合対馬共同調査委員会編 古今書院）の巻末の座談会「対馬共同調査の成果について」（以下「成果座談会」と略記）も参考になる。さらに、1963年度九学会連合年報『人類科学16』に掲載された「九学会連合共同調査の回顧と展望」（以下「回顧と展望」と略記）がある。これは、九学会連合が対馬以後に実施した全国各地の共同調査を回顧し、今後の方向について議論した記録であるが、ここにも対馬調査の経緯についての記述が含まれている。

ちなみに、一つの調査について、その経過や方法についての報告や議論の記録がこれほど残されているのは少ないのではないだろうか。それは、対馬共同調査が学会を越えた総合調査として日本で初めて取り組まれたということ、あるいは参加した学会のいくつかは当時はまだ学問として認知された歴史が浅いか認知されるに至っていなかった若い学会であったために、新しい研究を立ち上げるのだという熱気に満ちていたという事情もあったかもしれない。それにしても、こういう記録が残されていることは、学問の在り方を反省し、振り返るための原点を与えてくれるという意味で貴重なことである。

それはともかく、上記報告および記録を基に九学会連合による対馬調査の経過についてまとめておこう。といっても詳細な経過は報告および記録にゆずって、ここでは総合調査と小地域での集中的調査が実現した経過を中心にまとめておきたい。

まず、共同調査の発議については、前記小堀報告によれば「たまたま八学会の運営機関である理事会において、昭和二十六年度の大会における課題が議せられたときに、今迄のような『稲』『火』

『家』『東京』といったような形式のものではなく、実際に一つの地域をとってその実地調査を連合で行い、その上で各学問上の協力交換を行っては、ということが二三の理事から提案され」たことから始まったとされる。戦後、各種の学会が連合して学問を復興・新生させようという動きは、民族学・民俗学・言語学・人類学・考古学・社会学という隣接した6学会が1947年に連合するという形でスタートし、後に宗教学・地理学の2学会が加わって、1950年には8学会連合に拡大していた。共同調査の企画は、そういう学会の連合・共同の動きの中で出てきたのである。そして、戦後いち早くそういう諸学会の共同・連合の必要性を提唱し、その発展に尽力してきた渋沢敬三の役割は高く評価すべきであろう。

こうして始まった共同調査の企画は、調査地の選定の段階に入った。候補地は、淡路島、琉球、対馬の3か所に絞られ、その中から最終的に対馬に決定した。その理由は、「大陸文化と日本文化の交流点であろう(?)ということ、及び終戦迄要塞地帯であったため殆ど学術調査の行われていない処女地であること、それから又その面積も適当であること」(前掲小堀報告)などであった。この選定理由は、当然といえば当然であるが、研究者の側の理由、関心に限られており、現地側の事情にはほとんど考慮が払われていなかったことは注意しておくべきであろう。しかし、調査の準備段階において、現地の状況を把握するために、何回かの研究会の開催、予備調査員(泉靖一・金田一春彦)の派遣など相当の努力がなされたことは重要なことである(これも渋沢が奔走してあつめた資金によったものであった)。

次に、各学会の研究テーマの設定の様子を見ておこう。研究テーマの設定は、基本的には各学会の決定に任されていたようであった。実際、たとえば人類学会では、「対馬の先史学的研究」「対馬住民の形質人類学的研究」「対馬住民の形質人類学的研究生体測定及び手掌紋の研究」「対馬住民の食物及び住居に関する衛生学的研究」「対馬におけるフィラリア症及び蚊族の研究」などのテーマが設定されているが、いずれも人類学プロパーのテーマであって、必ずしも他の学問分野との共同を必要とするものではなかった。これは、他の学会でも同様の傾向が見られ、九学会対馬共同調査の大きな特徴となった一つの小地域の集中的総合的調査は、当初の段階では設定されていなかったようである。後に、そういう調査を実施する中心になった民族学協会でも、事前のテーマは「対馬の漁法漁労の研究」「対馬における霊地の研究」「対馬における隠居の研究」「対馬の民具に関する研究」などであり、集中的調査の課題は掲げられていない。

こうして、1950年度の現地調査がスタートした。調査の費用は文部省から70万、長崎県から23万4千、対馬の町村連合会から12万、総計105万4千円という当時としては多額の費用が確保された。そして現地では7月5日から8月20日までの1ヶ月半、8学会の研究者約70人という大部隊での調査が実施された。そして、翌年にも同額の費用で、約50人が参加して継続調査が実施されたのである。

そうしたなかで、いくつかの地域について集中的調査を実施することに決めていたのは民族学協会の研究班であった。その課題がいつ頃から明確に設定されたかは不明だが、この研究班では、現地に入る前に3つの集落を選び、調査を実施することにしていたという。この点について、前記「成果座談会」で泉靖一は、「対馬の文化の構造ということを経験的に明らかにすること、そういう意味から対馬の中の3つの標本的村を選びまして、その村の文化をインテンシブに分析してみるということ」

を1つの目標としたと述べている。それは、「回顧と展望」でも確認している。その場合の3つの標本村は、対馬北端の鰐浦と中部の仁田と南端の豆敷とであった。『対馬の自然と文化』でモノグラフが掲載されているのは、鰐浦と豆敷に関するもので、仁田については残されていない。代わって、鴨居瀬が掲載されているが、鴨居瀬は最初に地理学会が取り組んだ地域であって、民族学協会の計画の中には入っていなかった。

民族学協会が1つの集落について総合的な調査を計画したという場合、どの程度の総合を考えていたのかということになると、そこには多少問題があると考えざるをえない。泉はおなじ座談会で次のように語っている。すなわち「鰐浦におきましては主として社会人類学と民族学及び形質人類学の協力が行われ、そしてそれに対して心理学の協力（心理学会は51年からの参加で、これによって九学会共同調査ということになった——筆者注）が行われたわけではありますが、その間の結びつきというものはいまうまくいっていない」と。総合調査といっても、参加学会、というより参加を求めた学会も最初から限られていたわけである。

しかし、現実には想定を乗り越えた。もっとも顕著なのが豆敷の場合である。豆敷には、共同調査に参加した複数の学会が、それぞれの問題意識に基づいて調査に入っただけで、せつかくいろいろな学会が調査しているのだからということで「総合的」調査が実現したということが実態であるようである。総合といい、共同といい、その難しさはよく理解できる。しかし、当時はそれを総合調査に高めようという意志が共有されていたのであろう。だからこそ、後述するように調査についての方法論に関する激しい議論が展開されることになったであろう。

それにしても、鰐浦・鴨居瀬・豆敷、それから地理学会単独の報告ではあるが、廻などの集中的調査の記録が残されたことは幸運であった。少なくとも、その記録によって65年前の実態の一部についての情報が残されることになったからである。

総合調査、集中的調査いずれであれ、初めての試みである以上、うまくいくはずもなかったのは当然のことであろう。それを責めるつもりはまったくない。残念なのは、当時の議論が生かされているとは思えないことである。失敗からこそ学ぶべきものがあるはずであるが、当事者が多くの失敗を語っているにもかかわらず、そのことに触れた記述をあまり見たことがない。門外漢のもの知らずではあろうが。

調査方法論の問題について

共同調査が、前述したように、各学会単位で独立に研究目標が立てられたこともあって、調査の方法論においても必ずしも全体的な方向が決定されていたわけではなかった。そのことは、初年度の調査終了後の総括で問題となった。とくに、学問分野として隣接していると思われる民族学と民俗学の研究者の間で方法論の相違が目立った。前記「人文座談会」で行われた石田英一郎と和歌森太郎の間の論争がその相違を際立たせている。

同座談会で、石田は、形質人類学と民族学と共同で企画された豆敷での調査が総合調査として展開されるようになった過程を、「豆敷という非常に歴史的な古い深さを持ち、かつ地域的にも、文化的にも、他の部落から強い孤立性を持った独自の性格を備えた部落協同体の全文化構造を、もっと総合

的に掘り下げてみる、そうしたならばそこに対馬の研究の上ばかりではなく、また日本民族自体の文化の把握に大きなたがかりになるような、いろいろなおもしろい問題が出て来るのではないかと、また出て来そうだとすることを誰もが感ずるようになり、途中で計画を相当拡大して」といったと総括し、その調査の方法を次のようにまとめている。すなわち、石田は、「農業の方面から、漁業の方面から、家族その他社会構成の面から、それから物質文化、宗教的信仰行事、風俗習慣の面からそうした各方面からの分析が、皆個々ばらばらにそれぞれの対象を調査するというのではなくて、人間の社会なり、文化なりを構成しているカテゴリーが、豆酛という一つの協同体においてどのような姿で有機的に噛み合っているか、どのような姿で1つの全体構造をなして機能を営んでいるか、それが歴史的にどのような変遷を経、また現在どのように変化しつつあるか、そういう時間的にも空間的にも1つの全体として連なった文化共同体を総合的に把握してみよう」としたのだと主張している。

これは、同じ座談会で、岡田謙が「特に民族学とか、最近の社会学の方では、普通インテンシブ・メソッドという名前と呼ばれている」方法と同じような方法であるが、石田はその社会学的方法を適用しようという発想ではなかったようである。石田の言を信じるならば、石田は豆酛での調査の経験の中からそうした方法の必要性・有意義性を認識したことになる。また、それを諸学の研究者による共同調査として実現しようとした点にこの調査の意義を見出すことができるであろう。

それはともかく、このような石田の方法論に関する発言に対して、民俗学を代表する立場にあった和歌森は、「或る地域に定着して、機能的な分析を進める」ことの意義を認めつつも、それよりも「歴史的な角度からの比較研究」の必要性を強調している。そしてその比較研究の方法について、民俗学班が特に関心を持った天道信仰を例にしながら、次のように述べる。すなわち、「ある村のある天道信仰の型はABCという複合でもってできている。ほかの村へ行くと、AはないけれどもBC、あるいはD、あるいはBCDといったような複合で維持されているというようなことで、それぞれだけを一見するとずいぶん違いがあるようだけれども、分析してみると重なり合っている。そんなことから全体を重ね写真のように一列に並べて行くなれば、こっちの型の方があとから生まれた要素であるとか、あるいはほかに比べてみると先にあった要素だというふうなことがわかって来て、前後関係がおさえられる」と。これは、民俗学でいう重出立証法であって、その方法によって明らかにしようとするのは「つまり民俗学というものは、ある局地の現象が問題ではなくて、それらを比較した上へ立って得られて来る日本全体の問題なのです」ということになる。したがって、いくら和歌森が、一定地域のインテンシブな調査の意義を認めるといっても、それはあくまでデータを提供する補助的な役割しか期待されていないということになる。

この違いは、比喩的に言えば、「豆酛を調査する」か「豆酛で調査する」かの違いになるが、後者の場合は、豆酛は比較のために複数設定された調査地のうちの一つということになる。「回顧と展望」は、「豆酛・鰯浦のような一地域の共同調査と、広地域にまたがる特定問題たとえば聖地信仰の問題についての共同調査」という共同調査のタイプ・類型レベルの問題としてとらえているが、問題はそこにとどまらない。この相違の背後には、石田と和歌森の、あるいは民俗学と民族学の研究目的の相違があるのではないだろうか。

和歌森は、石田に対して「お話を聞いていると、やはり人間社会、人類一般の縮図を見て行かれるというところに立って来られたのではないだろうか」と「批判」し、自分の研究目的について「日本

人全体の中における対馬の歴史的位罫、それから対馬の人が今日持っている生活の歴史的意味を見ようとするのです」と主張している。はたして、石田や民族学が、人類一般だけを見ようとしているかどうかは問題のあるところであるが、和歌森や民俗学にとって日本人、あるいは日本の歴史・文化が問題であって、対馬そのものが問題であるわけではないということになる。

いずれにしても、方法は異なるが、対馬そのもの、あるいは対馬に生きている人々にとってその研究がどういう意味を持つのかという視点は両者ともに希薄であることは否めない。対馬には対馬の、豆殿には豆殿の、鰐浦には鰐浦の、その土地その土地には独自の文化があるのではないかという想定は、どちらの調査にもみられない。そういう視点の欠如は、多様性についての関心よりは、同一性への関心が優位していることからくるのであろう。そして、それは、地域への関心が高まる以前の研究の段階であることからくるやむをえない現象であったのかもしれない。

以上、集落単位の集中的調査をめぐる方法論的対立を検討してきたが、九学会による共同調査で、それなりの集中調査の記録が残されたのはこの対馬調査だけであることも事実である。その後の能登調査、佐渡調査と回を重ねるに従って調査の方法は整備され、報告書の形も整ってきたといえるが、対馬調査のような集落単位の調査記録という観点からみると整備されているだけ魅力が乏しい感じを与えられる。それは、方法論の問題でいえば、学会間の調整という共同調査の組織論に関する問題に関心が移行し、集落単位の集中調査の意義に関する議論が深められなかったことからくるものであろう。対馬調査は、九学会による最初の共同調査であっただけに、調査の目的、研究課題の設定、方法論の確認、共同研究組織の在り方など多くの課題が残されていたことは否定できない。しかし、そこには、たしかに多くの可能性が存在していたことも事実である。そして、その可能性は、現在でも十分に開かれているとは言い難いのではあるまいか。

残された課題について

先にも述べたように、九学会対馬共同調査は、日本で行われた最初の学会の枠を超えた大規模な地域研究であった。そのため、初めであることから生じる不都合や不整合があったことは否定できない。しかし、問題は、それをどう教訓化するかということにある。その点で、この調査が、単なる調査結果としての研究論文だけでなく、調査それ自体の記録を残していることの意味は小さくない。中でも、「成果座談会」における渋沢敬三の残された課題についての発言は、軽視できない重みを持っている。それは、渋沢が、この調査の最大の貢献者であったことによるわけではない。それは、その発言が、研究者が発しないような内容を持っているからである。

渋沢は、極めて慎重な言い回しで、二つの点について指摘している。一つはこの調査が対馬に何を残したか、あるいは何を残そうとしたかということである。渋沢は、これは「学問に帰属しない一つの夢みたいな話であります」と断った上で、「向うから資料をとってくる大切なことで、学問のために皆の勉強になるんであります、向うに何が与えられるかという問題が、一応まあ頭のすみにもある方がいいのじゃないかという感じもしたのであります」と述べ、さらに、「これはちょっと生意気に聞こえるかもしれませんが、また学会を通じて大きな基礎的な寄与ということは、もちろんあったであります。しかし更に進んで、こういうことはいかんじゃないか、とか、他との比較において

多少でも反省になるような意見を出した方がよかった。(中略)それを意識的にとり上げずに、向うから搾取といった失敬ですけれども、とりばなしというのが多かったのではないかと反省も込めて、調査団の姿勢を問題にしている。

もちろん、渋沢自身が認めているように、そういう忠告がましい発言が不用意になされれば、かえって問題を引き起こすことも考えられる。そういう発言は、その内容の良し悪しにかかわらず、発言する側と受け取る側の間に信頼関係がなければ、何の意味も持たない。問題は、そういう信頼関係を作るための努力が、調査中、調査後を問わずなされたかにある。九学会調査後も何度か対馬を訪問した宮本常一の行動は、その意味で例外的であったように思われるのは、筆者の調査不足によるものであろうか。

つぎに、渋沢が指摘した二つ目の問題について検討しよう。渋沢は、先の発言に続いて、つぎのように述べている。すなわち「対馬というのが先程駒井先生だかがおっしゃったように軍の要塞地帯で、本当にリザーブされて、そのまま封鎖炭田式のものであったんですから、その関係による重大性というものがどのくらいひどくあったか知らんといったふうな面ですけれども、これは九学会の問題だかどうか知りませんが、そういったようなことがもう一寸明らかにされれば面白かったらうなあという気がしたのであります」と。この発言は、「終戦迄要塞地帯であったため殆ど学術調査の行われていない処女地であること」という調査地に対馬を選んだ理由とは若干角度がちがうという印象がある。実際、調査に入った研究者は、対馬に近世以前の古い日本が残っているのではないかという期待を抱き、そういう関心から対馬の社会や文化を調査した傾向があったようにおもわれるからだ。ようするに、それは調査する側にとっては好条件だったということになる。

しかし、調査する側にとっての好条件は、調査される側にとって好条件であるとは限らない。まして軍事的要請によって「孤立」させられていたことがよかったはずはない。だから、渋沢は、「その重大性が対馬の人達にとって、どれだけ情ないことになっていたか、それから同時にどうしたら回復を早く出来るのかというような問題が向うの人としては、非常に切実に感じていることだと思っております」と指摘したのである。

ここでも、対馬という調査の対象とした地域の人達に何を与えることができるのかという問題意識が見いだせるが、それだけではない。渋沢は、人類にせよ、日本人にせよ、そうした集合的表象に結び付けられた社会や文化の問題を論じることの意味を否定しているわけではないが、そうした問題と同時に、そこに生きて、生活している人々の、「現在」の具体的問題にも目を向ける必要があるのではないかと、ということをも主張したかったのではないだろうか。

渋沢が指摘した残された問題は、渋沢自身が何度も断っているように、学会あるいは研究というレベルの問題ではないかもしれない。しかし、社会や文化に関する調査や研究が、研究する側だけの関心に従ってなされ、その対象となる人々が単にデータを提供する存在にすぎないものとして扱われるならば、それは研究の目的自体が問われることになることも忘れてはならない。その意味で、この調査で残された問題が、現在においても研究者に投げかけている問題は小さくない。

さらに、この調査には、渋沢が指摘したような問題だけではなく、研究そのものについても重大な問題が残されていた。それは、歴史とくに文献史学的研究・調査が欠けているという問題である。調査団員の多くが注目した本戸・寄留関係の問題にしても、近世期の身分制に関する歴史学的研究が不

十分なために、その階層制あるいは身分制としての性格が明確ではないといわざるをえない。ただ、この問題は、対馬調査に限った問題ではなく、そもそも九学会連合に歴史系の学会が一つも参加していないことに根源があったのであろう。したがって、なぜ歴史系学会が九学会連合に参加しなかったのかということが問題になるが、その問題はここでの直接のテーマではないので、問題点の指摘にとどめておきたい。

それから、もう一つ。九学会調査では、当時としては珍しいほど写真や映像で記録が撮られたはずであるが、それが有効に活用されたとは思えないこともあげておかなければならない。これも渋沢の提言によったと思われるが、残念ながら映像は、現在ではどこにあるのかすら分らなくなっている。木坂での聞き取りでは、宮本常一が盆踊りの撮影をしたことは確認できたが、そのフィルムの行方は分らなかった。写真にしても、『対馬の自然と文化』では、巻頭の口絵として何枚かが使われているだけで、少なくとも系統的には使われていない。記録としての映像や写真の価値は高いものがあるだけ、この点は残念なことといわざるをえない。もし、この調査での映像や写真の行方をご存じの方がいたら、是非ご教示願いたい。これも、残された問題として、一言申し添えておきたい。

おわりに

いろいろ問題点ばかりをあげてきたような気もしないではないが、九学会対馬共同調査は、その後に行われた九学会のどの調査よりも興味をひかれるものがあることも事実である。そこには新しい試みに挑む気力があり、混沌の中に潜む大きな可能性を見ることができる。だからこそ、この調査を基として60年後の対馬を調査してみようという気にもさせられた。また、そうであるがゆえに、この調査が、対馬の人々にどのように記憶されているかということが気になった。

もちろん、調査の目的が60年前の九学会調査との比較であるので、話を聞く場合、まず「60年前の調査はご存じですか」と聞くことになる。当時成年かそれに近い人達はいうまでもなく、まだ若い人達も、詳しいことは分らないがという断わりつきであるが、大規模な調査がかつて行われたという事実は認識していた。そして、複数の人から「あの調査で、対馬の人間は朝鮮人ではないということが分かったといわれた」という話を聞かされた。「われわれが日本人かどうかを調べに来たんですかね」と、調査当時はまだ生まれていなかった比較的若い世代の人は続けた。「身長・座高・頭の形まで計測されたからね」と調査を経験した老人が応じた。「あまり愉快的な話ではないね」という感想を聞かされた。

たしかに『対馬の自然と文化』には、身体計測のデータに基づいた報告が記載されている。そして、その調査の目的は、朝鮮半島に最も近い地理的位置にある対馬の文化が、大陸文化とどういう関係にあるか、それはどういう系統の文化に属するか、という問題を解明するための基礎的データを収集することにあつたのであって、対馬の人々が日本人であるか否かを調べるためではなかつたであろう。しかし、身体のあちこちを計測された側にとってみれば、そのこと自体が必ずしも愉快的なことではない。まして、その目的が知らされていないか、理解できていなかったとすれば、ただ実験台にされたという実感しか残りようがないだろう。

当時、きちんと調査される側が納得できるように説明がなされたどうか、身体というプライバシー

そのものについてデータをとることについて同意をうるための手続きがとられたかどうか、今となっては確かめるすべはないかもしれない。しかし、調査の対象となった人々にそのような印象が残っているという事実は、調査や研究に従事する者がけっして忘れてはならない事実であろう。

60年前の調査を基として「持続と変容」の実態を究明しようとした本調査も、60年前の調査が残した課題にこたえているとはとうてい言えないことは十分自覚しているつもりである。ただ、「こんな話を聞いてくれる者はもういなくなった。聞いてくれてありがたかった」、「そんなこともあったんだ。もっと早く聞いておくべきだった」という言葉を聞いたことは、そういう言葉を吐かせる現実の厳しさを切実に感じさせられただけではなく、調査し、記録を残すことの意味を教えられたという意味でありがたかった。いろいろお教えいただいた方々に感謝するのみである。